

定本
橫光利一全集

定本
横光利一全集
第三卷

河出書房新社

定本 橫光利一全集 第三卷

昭和五十六年九月二十日 初版印刷
昭和五十六年九月三十日 初版發行

著 者 橫光利一
校訂者 保昌正夫
發行者 清水 勝

發行所 株式會社 河出書房新社

東京都澁谷區千駄ヶ谷二一三二一
電話 四〇四一一二〇一（營業）
四〇四一八六一一（編集）
振替口座（東京）〇一〇八〇二

印刷 多田印刷株式會社
製本 小高製本工業株式會社
Printed in JAPAN

© 一九八一

目次

午前	參考作品	寢園	鞭	機械	鳥	高架線	芋	失戀	兄妹行進曲	上海
586		388	379	350	330	314	307	305	247	3

解題
編集ノト

保昌正夫

591

定本 横光利一全集 第三卷

上海

一

満潮になると河は膨れて逆流した。火を消して蜆集してゐるモーターボートの首の波。舵の竝列。抛り出された揚げ荷の山。鎖で縛られた棧橋の黒い足。測候所のシグナルが平和な風速を示して塔の上へ昇つていつた。海關の尖塔が夜霧の中で煙り出した。突堤に積み上げられた樽の上で、苦力達が濕つて來た。鈍重な波のまにまに、破れた黒い帆が、傾いてぎしぎし動き出した。白哲明敏な、中古代の勇士のやうな顔をしてゐる參木は、街を廻つてバンドまで歸つて來た。波打際のペンチには、ロシア人の疲れた春婦達が竝んでゐた。彼女らの黙々とした腫の前で、潮に逆らつた舢舨の青いランプが、はてしなく廻つてゐた。

「あんた、急ぐの。」

春婦しゅんぶの一人ひとりが首くびを參木さんぎの方ほうへ振り向むけて英語えいごで云いつた。彼は女おんなの二重ちゆうりゆうになつた顎あごの皺しわに、白しろい斑點はんてんのあるのを見みた。

「空あいてるのよ、ここは。」

參木さんぎは女おんなと竝ならんで坐すわつたまま黙だまつてゐた。

「煙草たばこ。」と女おんなは云いつた。

參木さんぎは煙草たばこを出だした。

「毎晩まいばんここかい。」

「ええ。」

「もうお金かねもないと見えるな。」

「お金かね？」

「うむ。」

「お金かねもないし、お國くにもないわ。」

「それや、困こまつたの。」

「さう。」

霧きりが帆船ほげたにからまりながら湯氣ゆげのやうに流ながれて來た。女おんなは煙草たばこに火ひを點つつけた。石垣いしがきに縛しばられた船ふねが波なみに揺ゆれる度毎たびごとに、きらきら、舷名げんめいのローマ字じを瓦斯燈ガスとうの光ひかりに代かはる代かはる浮うき上あがらせた。樽たるの上うへで賭博とばくをしてゐる支那人しなじんの首くびの中から、鈍だふい銅貨どうくわの音おとが聞きこえて來た。

「あんだ、行いかない。」

「うむ、今夜は駄目だ。」

「どうして、いらつしやいよ。」

「だつて、もう直ぐここで逢はなくちや。」

「ぢや、駄目ね。」

女は足を組み合した。遠くの橋の上を馬車が一臺通つていつた。参木は時計を出してみた。甲谷の来るのはもう直ぐだつた。彼は甲谷に宮子と云ふ踊子を一人紹介される筈になつてゐた。甲谷はシンガポールの材木の中から、此の濁つた支那の海港の上海へ、妻を娶りに來たのである。――

濡れた菩提樹の隙間から、縞を作つた瓦斯燈の光りが春婦の皺のよつた靴先へ流れてゐた。すると、その縞の中で、間もなくひと流れの霧が、急がしさうに朦朧と動き始めた。

「歸らうか。」と一人の女がいつた。

「歸ろ。」

春婦達は立ち上ると鐵柵に添つてぞろぞろ歩いた。一番後になつた若い女が、青ざめた眼でちらりと参木の方を振り返つた。と、突然参木は煙草を銜へたまゝ、夢のやうな悲しさに襲はれた。競子が彼に別れを告げたとき、彼女のやうに彼を見降ろして行つて了つたからである。

春婦達は船を繋いだ黒い繩を跨ぎながら、樽の間へ消えてしまつた。後には踏み潰されたバナナの皮が、濡れた羽毛と一緒に残つてゐた。突堤の先端に立つてゐる警邏の塔の入口から、長靴を履いた二本の足が突き出てゐた。

參木はひとりになると、ベンチに凭ながら古里の母のことを考えた。その苦勞を續けて、なほますます優しい手紙を書いて来る母のことを。——彼はもう十年日本へ歸つたことがない。その間、彼は銀行の格子の中で、事務の食つた預金の穴をペン先で縫はされてゐただけだつた。彼は、忍耐とは、此の生活の上で、他人の不正を正しく見せ續ける努力にすぎないと云ふことを知り始めた。さうして、彼はそれが馬鹿げたことだと思ふ以上に、いつの間にか、だんだんと死の魅力に牽かれていつた。彼は一日に一度、冗談にせよ、必ず死ぬ方法を考へた。それが最早や、彼の生活の、唯一の整理法であるかのやうに。彼は甲谷を攫まへて酒を飲むと、いつも云つた。

——お前は百萬圓擱んだとき、成功したと思ふだらう。ところが俺は、首を縄で縛つて、兩足で踏臺を蹴りつけたとき、やつたぞと思ふんだ。——

が、彼は絶えずその眞似だけはやつて來た。しかし、彼の母が、彼の頭の中に浮び上ると、またその次の日も、朝からズボンに足を突き込んで歩いてゐた。

——俺の生きてゐるのは、孝行なのだ。俺の身體は親の身體だ、親の。俺は何んにも知るものか。——

參木に赦されてゐることは、事實、ただ時々古めかしい幼児のことを追想して、涙を流すことだけだつた。彼は泣くときには思ふのだ。

——えーい、ひとつ、ここらあたりで泣いてやれ。——と。

それから、彼はポケットへ兩手を突き込みながら、生きてゐる各國人の、殆どそれは自棄糞に近い馬鹿騷ぎを、祭りを見るやうに見に行くのだ。

しかし、甲谷がシンガポールから来てからは、参木は久し振りに元氣になつた。甲谷と彼とは小學時代からの友達だつた。参木は甲谷の妹の競子を深く愛してゐた。しかし、甲谷がそれを知つたのは、競子が人妻になつて後だつた。甲谷は云つた。

「馬鹿だね、君は、何ぞ俺に一言それを云はなかつたのだ。云つたら、俺は。」

云つたら甲谷は困るにちがひないと、参木は思つて黙つてゐた。そして、今までひとりひそかに困つてゐたのは参木である。だが、彼は、今は一切のことをあきらめて了つてゐる。——生活の騒ぎのことも、彼女のことも、日本のことも。ただ時々彼は海外から眺めてゐると、日本の着として進歩する波動を身にかけて喜ぶことがあるだけだつた。しかし、彼は最近、甲谷から競子の良人が肺病で死にかかつてゐると云ふ消息を聞かされてからは、身體から、釘が一本抜けたやうに朗らかさを感じて來た。

二

崩れかけた煉瓦の街。其の狭い通りには、黒い着物を袖長に着た支那人の群れが、海底の昆布のやうにぞろり満ちて淀んでゐた。乞食等は小石を敷きつめた道の上に蹲つてゐた。彼等の頭の上の店頭には、魚の氣胞や、血の滴つた鯉の胸切りが下つてゐる。そのまた横の果物屋には、マンゴやバナナが盛り上つたまま、舗道の上まで溢れてゐた。果物屋の横には豚屋がある。皮を剥がれた無數の豚は、爪を垂れ下げたまま、肉色の洞穴を造つてうす暗く窪んでゐる。そのぎつしり詰つた豚の壁の奥底からは、一點の白い時計の臺盤だけが、眼のやうに光つてゐた。

此の豚屋と果物屋との間から、トルコ風呂の看板のかかつた家の入口までは、歪んだ煉瓦の柱に支へられた深い露路が続いてゐる。参木と逢ふべき筈の甲谷はそのトルコ風呂の湯氣の中で、蓄音器を聴きながら、お柳に彼の背中をマッサージさせてゐた。お柳は富豪の支那人の妾になりながら、此の浴場の店主を兼ねた。勿論、お柳は客の浴室へ出入すべき身ではない。だが、彼女の好みにあつた客を選ぶためには、番號のついたその幾つもの浴室を遊ばせておくことは、不經濟にちがひなかつた。

お柳は客の浴室へ來るときは前からいつも、身體いづばいに豊富な石鹸の泡を塗つてゐた。マッサージがすむと、主人は客の身體に石鹸を塗り始めた。——間もなく二人の首が、眞面目な白い泡の中から浮き上ると、お柳は云つた。

「今夜はどちら。」

甲谷は参木と逢はねばならぬことを考へた。

「参木が突堤で待つてゐるのだが、もう幾時です。」

「さうね、でも、抛つといつて、あの方こちらへいらつしやるにちがひないわ。それよりあなた、いつ頃シンガポールへお歸りになるの。」

「それは分らないんですよ。僕は材木會社の外交部にゐるもんですから、こちらのフィリッピン材を蹴落してからでなくちや、と思つてゐるんです。」

「ぢや、もう奥さまはお探しになりましたの。」

「いや、それは、まアさう急いだことぢやなし、それにマダムが僕の傍にゐて下さりや、さう急

いで妻君なんか貰ふ氣がなくなりましたよ。」

お柳の泡がいきなり甲谷の額に叩きつけられた。スイッチがひねられた。と、壁から吹き込む蒸氣と一緒に、蓄音機がベリーマインを歌ひ出した。それに合せて、甲谷は小さきみなステップを踏み始めた。するとゆつくり絞り出された石鹸の泡は、その中に包んだ肉體を清めながらぼたぼた花のやうに滴つた。その度毎に、お柳の背中から華麗な蜘蛛の入墨が、だんだん鮮かに浮き出て來た。

「ね、もしあなたが奥さまをお貰ひになるときは、一應あたしに相談なさらなさいけないことよ。」

「だつて、あなただけが僕に隠して、僕だけがあなたに相談するつて云ふ法はありますかね。」

「それや、あたしとあなたは人柄が違つてゐるわ。あたしは支那人のおめかけさんよ。」

「さう今頃から正直なことを聞かされちや。——」

お柳の胸に腕を延した蜘蛛の皮膚から汗が出て來た。やがて、蒸氣が浴室に溢れ出すと、一面長方形の眞白な霧の中に、主人も客も蜘蛛も泡も、茫々として見えなくなつた。蒸氣の中からお柳の聲が聞えて來た。

「あなた、今夜はどこへも行かないつてお約束してちやうだい。」

「だつて、僕は參木を待たせてあるんですよ。」

「參木さんなんか、どうせどつかで、ぶらぶらしてゐるわ。」

「もう蒸氣をとめてくださるといいですね。」

「いやよ、行かないつて仰言らなけりや。」

「これぢや息がつまつて、苦しくつて——。」

「だつて、もういい加減に覺悟をなさいな。ここぢや誰だつて一度はひどい目に逢はなくちや。」

「奥さん。」

そのまま、二人の聲は切れて了ふと、蒸氣もぶつとりとまつてしまつた。

三

參木は疲ながら、トルコ風呂まで歸つて來た。だが、そのときは、もう甲谷は參木に逢ひに突堤へ行つた後だつた。

參木は應接室のソファアに沈み込んだまま黙つてゐた。浴場の奥から湯女達の笑ふ聲と一緒に、ポルトギーズの猥雑な歌が聞えて來た。時々蒸氣を抜く音が壁を震動させると、テーブルの上のチューリップが、首を垂れたまま慄へてゐた。

一人の湯女が彼の傍へ近寄つて來た。彼女は彼の横へ腰を降ろすと、横目で參木の高く締つた鼻を眺めてゐた。

「眠いのか。」と參木はい云つた。

女は兩手で顔を隠して俯向いた。

「風呂は空いてゐるのかね。」

女が黙つて頷くと、參木はい云つた。

「ぢや、ひとつ頼まう。」

参木は前から此の無口な女が好きであつた。彼女の名はお杉と云ふ。お杉は参木が来ると、女たちの肩越しにいつも参木の顔をうつとりと眺めてゐた。

湯女達が狭い廊下いつぱいに、水々しい空気をたてて、華やかに亂れて来た。

「まア、参木さん、暫くね。」

参木はステッキの握りの上に顎を乗せたまま、じろりと女達を見廻した。

「あなたの顔は、いつ見てもつまんなさうね。」と、一人が云つた。

「それや、借金があるからさ。」

「だつて借金なんか、誰でもあるわ。」

「それぢや、風呂へでも入れて貰はう。」

女達は、ぱつと崩れて笑ひ出した。そこへお杉が浴室の準備を整へて戻つて来た。参木は浴室へ這入ると、寝椅子の上へ仰向けに長くなつた。皮膚が湯氣に浸つて膨れ出した。彼はだんだんに眠くなると、ふと此のまま、蒸氣を出し放して眠つてみようと考えた。

彼はスイッチをひねるとタオルを銜へて眼を瞑ぢた。身體が刻々に熱くなつた。もし此のまま死ねたら、とさう思ふと、競子の顔が浮んで来た。債鬼の周章で顔がちらついた。惨忍な専務の喜ぶ顔が。——専務の食つた預金の穴を知つてゐるのは彼だけだつた。間もなく銀行は停止を食ふにちがひない。格子の中から見た無數の顔が、暴風のやうに渦巻くだらう。だが、駄目だ。何もかも、人間の皺を製造するために出来てゐるのだ。——